

第4章 他神殿との比較研究

第4章 他神殿との比較研究

この章では、他のドリス式神殿との形体の比較により、メッセネ神殿の歴史的な位置づけを行う。テメリス氏は、考古学調査の結果からメッセネ神殿の建設時期は、紀元前4世紀の終り頃としている。¹⁾そこで、紀元前4世紀から紀元前1世紀ころ（クラシック末期からヘレニズム時代にかけて）のドリス式神殿の特徴を明らかとし、さらにこの時代におけるメッセネ神殿の特徴を明らかとする。また、オーダーのプロポーションの比例関係からメッセネ神殿の建設年代を推測し、神殿の柱の高さを復元する。

プロポーションの変化に関して参照するドリス式建築のデータは同時期のドリス式神殿について網羅的にデータを収集しているスィウンパラ氏の資料²⁾をもとに収集し、筆者が新たな資料を加えたものである。対象とする建築は紀元前400年から0年頃に建設されたドリス式オーダーを持つ建築である。神殿に関して50例（うち周柱式41例）、ストア等のその他に関して23例のデータを収集した³⁾。(PLATE 120, 121 参照)参照建築の地域はペロポネソス半島(A)、アッティカ以北のギリシア(B)、エーゲ海の島々(C)、トルコ・小アジア(D)、エジプト・リビア(E)としている。イタリア・シチリア地方に関しては、この時期におけるドリス式周柱式神殿を見つけることができなかった。また、この地方における前柱式のドリス神殿は数例確認できたが、いずれも寸法を得るだけの資料が不足していたため、参照図からは除外している。

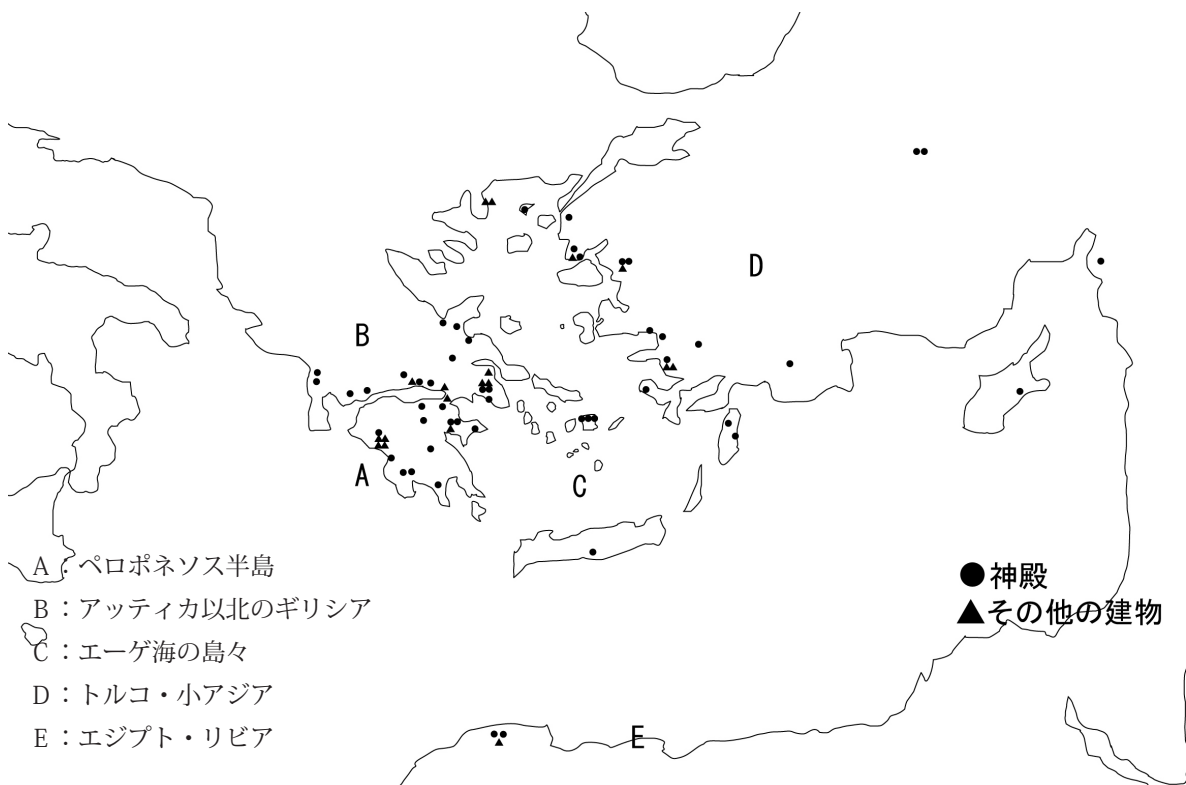


図4-1 周柱式神殿分布図（紀元前4世紀～紀元前1世紀）

1. 神殿の規模

神殿建築はわずか45㎡に満たないものから、6000㎡を超えるものまで、様々な規模の物が作られてきた。しかし、巨大なドリス式神殿の建設は紀元前5世紀を限りとして、建てられなくなったと言われている。⁴⁾

熊本大学名誉教授堀内清治氏はその規模と柱の関係から、スタイロバートでの面積が350㎡以下の物を小神殿、1000㎡以下の物を普通の神殿、それ以上を大神殿としており、さらにそれ以上にけた外れな大きさを持つ神殿を巨大大神殿と定義している。⁵⁾

実際に今回採取したデータをその定義に当てはめてみると、紀元前4世紀以降において、それ以前に見られたような巨大大神殿はなく、周柱式ドリス式神殿41例のうち、大神殿に属する神殿が2例、普通の神殿に属するものが17例、小神殿に属するものが17例であった。しかしながら、大神殿の値を示す、デルフィのアポロ神殿は、紀元前373年に自然災害によって崩れたあと、再建された建物であるため⁶⁾、紀元前4世紀になって新たに計画された大神殿とは言い難い、また、クラロスのアポロン神殿に関しては、スタイロバートの長さが不明であっ

	都市名	神殿名	柱数	基本柱間 (m)	全長 (m)	スタイロバート長さ (m)	面積 (㎡)
1	Kourno	Small temple	6x7	1.545	8.40x9.96	8.05x9.60	77
2	Demetriias	Agora temple	6x10	1.600	9.60x16.00	8.75x15.25	133
3	Athen	Kronos and Rhea	6x9	1.85	10.08x15.63		(158)
4	Emecik/ Alt Knidos	Apollon	6x11		11.60x21.11	10.20x19.70	201
5	Lepreon	Demeter	6x11	1.956	11.98x21.69	10.445x20.226	211
6	Messene	Messene temple	6x12	1.920	11.024x22.544	10.092x21.612	218
7	Aegae	NW Temple	6x12		11.40x19.34		(220)
8	Olympia	Metroon	6x11	2.010	11.88x21.93	10.62x20.67	220
9	Ptoioin	Apollon	6x13	1.868	11.65x24.72	9.85x22.93	226
10	Eretreia	Dionysos	6x11	2.00-2.07	12.45x23.05	10.70x21.35	228
11	Aigeira	unknown	6x11		11.82x20.40		(241)
12	Gortys	Asklepios	6x11	2.90	13.44x23.99	11.315x21.76	246
13	Kallithea	Zeus	6x11	2.184	12.38x23.33	11.46x22.38	256
14	Pergamon	Athena	6x10	2.367-2.371	13.02x22.52	12.27x21.77	267
15	Epidaurus	Asklepios	6x11	2.258	13.20x24.45	12.03x23.28	280
16	Ephesos	Temple auf dem Staatsmarkt	6x10	2.257-2.72	14.50x22.20		(322)
17	Messene	Asklepios	6x12	2.398-2.390	13.664x27.970	12.710x27.016	343
18	Kallio	unknown	5x10	2.94-3.04		12.55x28.22	354
19	Delos	Apollo (peripteral)	6x13	2.2905		12.47x28.53	356
20	Molykreion	Poseidon	6x13	2.45	14.254x31.416	12.87x30.032	386
21	Alexandreia Troas	unknown	6x11		14.50x29.60	14.11x27.40	387
22	Alabanda	Artemis/ Hekate	6x11			15.18x27.70	420
23	Xanthos	Letoon Temple B	6x11	2.590-2.580	27.97x15.07		421
24	Kalydon	Artemis	6x13	2.50	14.94x32.55	14.02x31.63	443
25	Troizen	Hippolytos oder Asklepios?	6x11	2.887	17.365x31.783	15.045x29.463	443
26	Apollonia/ Kyrene	unknown	6x11	2.90	17.305x31.935	15.10x29.60	447
27	Ilion	Athena	6x12	2.877	16.40x35.70	15.13x32.39	490
28	Kos	Asklepios	6x11	3.050	18.075x33.280	15.965x31.170	498
29	Stratos	Zeus	6x11	3.160	18.32x34.12	16.64x32.44	540
30	Seleukeia/ Pieria	Isis-Aphrodite?	6x12		18.60x36.90	15.84x34.14	541
31	Rhodos	Appollo Pythios	6x11	3.72	22.25x40.90	19.80x38.45	761
32	Nemea	Zeus	6x12	3.745	21.88x44.448	20.085x42.549	855
33	Theben	Apollon	6x12	3.91	22.83x46.25	20.54x44.01	903
34	Tegea	Athena Alea	6x14	3.582-3.613	21.20x49.56	19.19x47.55	912
35	Klaros	Apollon	6x11		25.16x46.285		(1165)
36	Delphi	Apollo	6x15	4.138-4.083	23.82x60.32	21.68x58.18	1261
37	Pherai	Zeus Thaulios/ Ennodia-Hekate	6x12	2.743	15.81x?	14.44x?	?
38	Kassope	Aphrodite	6x10	1.800			?
39	Knidos	Apollon Kameios?	6x11				?
40	Lebadeia	Zeus Basileus	6x13				?
41	Sikyon	unknown	6x18				?

図4-2 周柱式神殿規模比較表（紀元前4世紀～紀元前1世紀）

たため、建物全長から計算を行っている。このため、実際の値は 1000m^2 を下回ると考えられ、実際に、大神殿と定義されるドリス式神殿はこの時代には作られなかったことがわかる。さらに、全体として 500m^2 にも満たない、神殿が大半であり、前時代に比べてかなり小規模な神殿しか作られなかったことがわかる。

メッセネ神殿は、その中でも、規模の小さな部類に属し、面積では、下から6番目、スタイロベートの正面長さでは下から5番目の大きさの規模であった。

2. ドリス式オーダーのプロポーション

次に、紀元前4世紀以降のドリス式オーダーのプロポーションの特徴を明らかとする。ドリス式オーダーのプロポーションに関しては、ウィトルウィウスが自身の建築書の中で述べているが⁷⁾、その比例関係は絶対的なものではなく、実際にはその値は様々に変化し使用されてきた⁸⁾。そこで、この時代のプロポーションの特徴から、メッセネ神殿の建築的特徴を明らかとする。

1) 柱のプロポーション

柱のプロポーションに関しては以下の寸法値からそれぞれの比例関係の分析を行う。⁹⁾ 柱のプロポーションに関して参照することができたサンプル数は神殿で24例、その他の建物で23例であった。(Plate 122 参照)

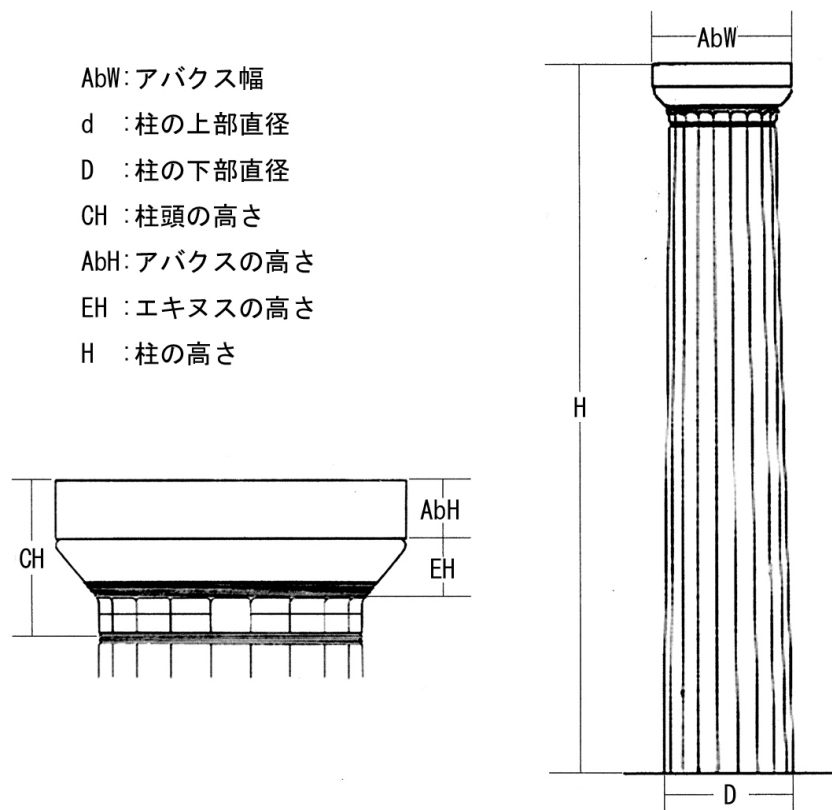


図4-3 柱のプロポーション使用寸法図

a. アバクス幅と上部直径 (AbW/d)

この値は、柱頭のくびれを表す値である。紀元前 300 年以前は、すべての種類の建物において値は 1.3 ~ 1.4 の間に集中しているが、前 300 年以降は値が 1.25 ~ 1.3 の間へと値が小さくなり範囲が狭まっている。しかし、前 200 年以降には値が分散している傾向が見られた。このことから、後の時代になるにつれ、柱頭のくびれは小さくなっていくということがわかった。この値は、メッセネ神殿においては 1.280 であり、1.30 を下回る。このことからこの値でみるとメッセネ神殿の柱頭は紀元前 300 年以降の形状をしていると推測できた。

b. アバクス幅と柱頭高さ (AbW/CH)

値は紀元前 300 年以前においては 2.5 ~ 3.0 の間に集中しており、特に神殿建築に関しては 2.7 に近い値を示しているものが多い。また、前 300 年を境に徐々に値が上下へと分散している傾向が見られた。メッセネ神殿におけるこの値は、2.66 であった。前 300 年以降もこの値をもつ神殿は存在しているため、一概には言えないが、傾向としては前 300 年以前あるいは前後によく見られた値であった。

c. 柱頭高さとおアバクス高さ (AbH/CH)

値は紀元前 300 年以前には 0.4 ~ 0.45 の間の物が目立つ、しかしペロポネソス半島においては 0.4 以下の神殿も 2 例見られた。前 300 年以降では 0.4 よりも小さい値が目立ちはじめ値は 0.3 ~ 0.45 の間に分散している。この値はメッセネ神殿においては 0.398 であった。値としては平均的な値を示していることがわかる。

d. エキヌス高さとおアバクス高さ (EH/AbH)

紀元前 300 年以前には 0.9 前後の数値を示すものが多く、1 を超える建物はほとんど見られない。300 年以降は 1 を超える値を持つものが増え始め、アバクスの高さよりもエキヌスの高さが上回る柱頭が出始める。しかし、前年同様に 0.9 前後の値を持つものも多数存在している。この値はメッセネ神殿においては 0.893 であり、平均的な数値を示していることがわかった。

e. アバクス幅と下部直径 (AbW/D)

全体を通して 1 よりも小さい例はなく、アバクスは下部直径よりも大きくなっていった。また、紀元前 250 年以前では値は 1.0 ~ 1.1 の間に集中するが、それ以降は 1.05 以上の値が目立ち、徐々に値が大きくなる傾向が見られる。この値はメッセネ神殿においては 1.092 であり、平均的な数値を示している。

f. 上部直径と下部直径 (d/D)

この値は、柱のくびれを表す値である。紀元前 300 年以前は 0.8 以下の値が目立つのに対して、前 300 年以降は 0.8 以上のものがほとんどとなる。つまり、柱のくびれは小さくなっ

ていく傾向が見られた。メッセネ神殿の値は 0.852 を示しており、紀元前 200 年前後に見られる値を示していた。同市のアスクレピオス神殿におけるこの値は 0.860 となっており、非常に近い値を示している。

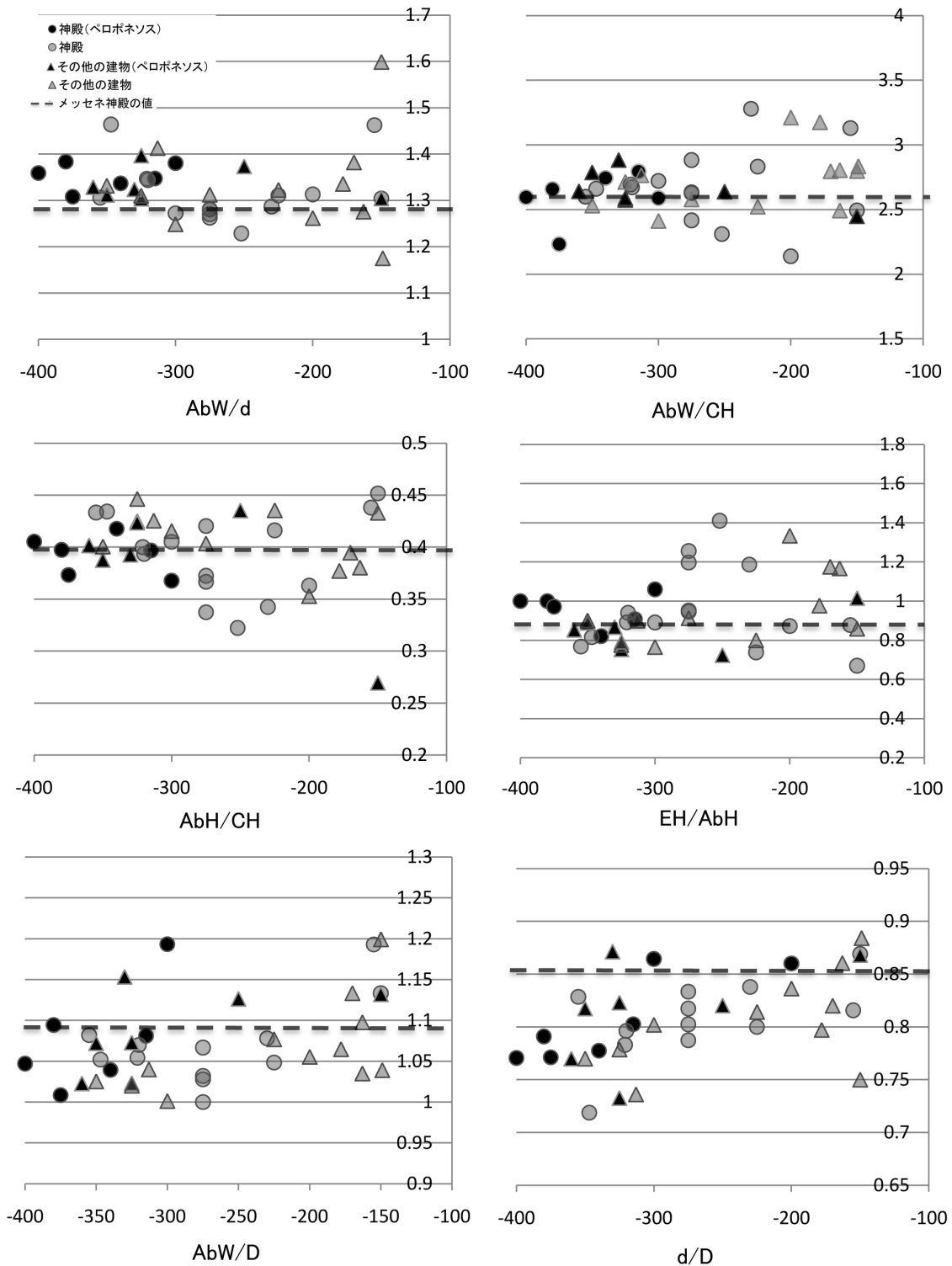


図 4-4 柱のプロポーション分析表 1

g. 柱の高さと下部直径 (H/D)

この値は、神殿のプロポーションに関してよく論じられる数値である。ウィトルウィウスは7の値となると述べているが、実際には時代によって大きく変化する値である。例えば、紀元前5世紀前半のオリンピアのゼウス神殿では4.72、5世紀後期にあたるアテネのパルテノンでは5.48と、時代によって値が大きくなっていく傾向があるとされている。¹⁰⁾ 実際に神殿建築に関して言えば、紀元前300年以前では5.5～6.5の間に値がおさまり、特に6.0～6.5に分布する割合が高い。また、前300年を過ぎると6.5を上回る値が増えている。このことから時代がたつにつれ柱は下部直径に対して細くなっていく傾向が見られる。一方、ストア等のその他の建築に関しては紀元前300年以前から6.5～7.0の間の値が目立ち、紀元前200以降では7.0を超える物も多数見られた。メッセネ神殿では柱の高さが不明であるため測定できない。

h. 柱の高さにおける柱頭高さの占める比率 (H/CH)

紀元前300年以前では値は15～17の間に集中しているが、300年以降は値が大きくなるものが増え、柱に対して柱頭は小さくなる傾向が見られる。しかし、200年以降になっても300年以前の値を示すものもみられ、前年のプロポーションを維持しているものも残っている。メッセネ神殿では柱の高さが不明であるため測定できない。

i. 柱のプロポーションのまとめ

全体として、紀元前300年を境にする変化が多く見られた。柱全体のプロポーションとしては、柱のくびれは年代が後になるにつれなくなっていく傾向が見られる。また、神殿建築においては柱の高さは下部直径の5.5～6.5の値から、7に近い値へと変化していき、柱は細く長いものになっていく。柱頭のプロポーションでは前300年以前では値が一定のものに集中するが、前300年以降は値にばらつきが生まれる。しかし、前300年以前と同じ値を持つも

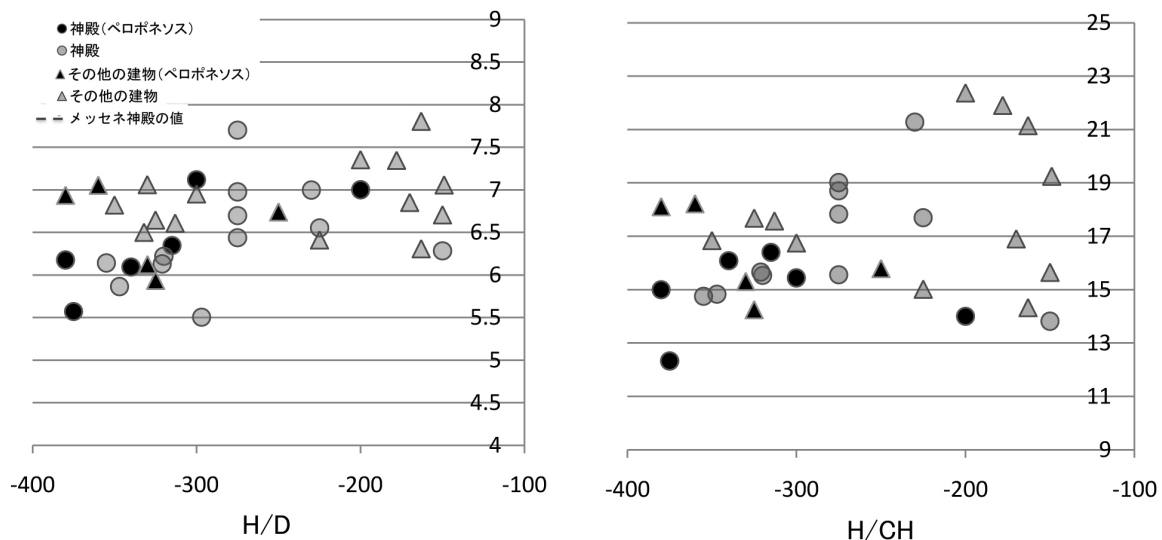


図4-5 柱のプロポーション分析表2

のも多数存在するため、前時代の形状をそのまま残しつつ、形状のバリエーションが増えたといえるかもしれない。値が変化する物は柱頭はくびれが大きくなり、柱頭におけるアバクスの高さの比率、および柱全体の高さにおける柱頭の比率が小さくなる。(この変化は主にストア等の建築で顕著である) その結果、柱全体として柱頭は目立たなくなり、コンパクトでプレートのようなアバクスの載った簡素なものへと変化する物が出現するということになる。しかし、先述したように、値は分散している傾向がみられ、その解釈は難しい。

メッセネ神殿の値については全体を通して、前300年以前に最も多いオーソドックスな値を示すことが多かったが、柱頭のかぶりや柱身のかぶりでは300年以降の値を示している。

しかしながら、前述したように、柱のプロポーションの値は300年以降値が分散する傾向があるため、プロポーションから建設年代を断定することはできなかった。テメリス氏の言うようにメッセネ神殿が紀元前4世紀終わりの建築であるならば、より、前300年に近い年代の物ではないかという推測がたてられる。

2) エンタブラチャーのプロポーション

エンタブラチャーのプロポーションに関しては下図(図4-6)の寸法値からそれぞれの比例関係の分析を行う。¹¹⁾ エンタブラチャーのプロポーションに関して参照することができたサンプル数は神殿で29例、その他の建物で21例であった。(Plate 123 参照)

a. フリーズの高さとトリグリフの正面長さ (FH/TW)

紀元前250年以前は値にばらつきがあり、1.4～1.7の値であるが、250年以降は値の範囲がやや狭まり、1.45～1.6付近に分布している。しかし、メッセネのアスクピオス神殿では1.67であり、紀元前200年ころの神殿としては大きな値を示していた。メッセネ神殿では1.54であり、平均的な数値を示していることがわかる。

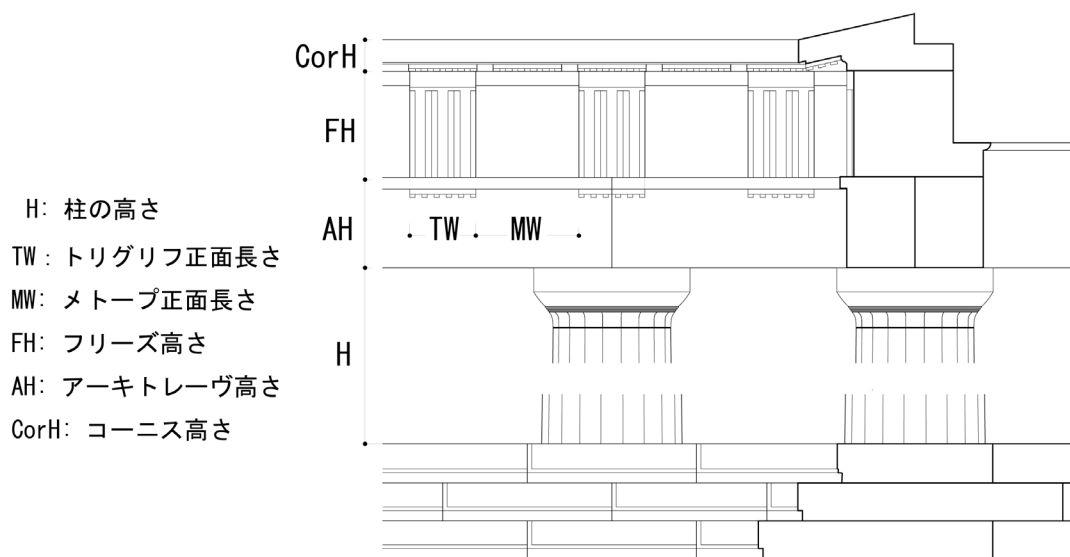


図4-6 エンタブラチャーのプロポーション参照寸法図

b. フリーズの高さとメトープの正面長さ (FH/MW)

神殿建築に関しては紀元前 250 年以前では 1 よりも大きい値が目立ち、値は 1.0 ~ 1.2 の間に分布している。また、ペロポネソス半島の神殿建築はより 1 に近い値を示していることがわかる。前 250 年以降は値は一時的に 1 よりも小さな値になるが、以降 1.0 ~ 1.1 に近づく傾向が見られた。つまり、縦長であったメトープは正方形の形に近づいていく。しかし、その他の建物では、250 年以降も 1.0 ~ 1.2 の広い範囲の値を示し続けた。メッセネ神殿ではこの値は 1.021 である。全体的な値としては 250 年以降多くみられる値であるが、ペロポネソス半島では 250 年以前からも多くみられる値であるため年代の特定はできなかった。同市のアスクレピオス神殿では値は 1.12 であり、メトープの形状はメッセネ神殿よりもやや縦に長い形状をしている。

c. メトープの正面長さトリグリフの正面長さ (MW/TW)

全年を通して、1.5 の値を中心に 1.4 ~ 1.6 の間で分布しているが、紀元前 300 年から紀元前 200 年に関しては、値が上下にばらつく。さらにその他の建物では紀元前 200 年以降は 1.5 よりも小さな値が目立っている。メッセネ神殿ではこの値は 1.507 であり、平均的な数値を示していることがわかる。また、同市のアスクレピオス神殿でも近い値を示していた。

d. フリーズの高さとアーキトレヴの高さ (FH/AH)

紀元前 300 年以前には 1.1 ~ 1.2 の間の数値をとり、以降はやや値が上昇していく傾向が見られる。しかし、例外的に大きく値が異なるものもあるようであった。また、1 例を除いて値は 1 よりも大きく、基本的にフリーズはアーキトレヴよりも高くなっていることがわかる。メッセネ神殿では値は 1.15 であり、分布の中心の値を示している。同市のアスクレピオス神殿では値がやや大きく 1.25 となっていた。

e. 柱の高さとエンタブラチャーの高さ (H/FH+AH+CorH)

エンタブラチャーの高さと柱の高さについてはドリス式オーダーのプロポーションを分析する上でよく用いられる関係である。堀内氏は Dinsmoor の寸法資料を用いて、アルカイック期からヘレニズムまでのオーダーの高さと柱の高さの関係について述べている。¹²⁾ (つまり $(H+FH+AH+CorH)/H$ である) この値を今回の値に変換すると紀元前 6 世紀には値が 2.0 を上回り柱の上には、柱の高さの半分以上のエンタブラチャーが載っていることになり、とても重苦しい形状をしていた。しかし、時代が進むにつれこの値は大きくなり、オーダーの高さに対してエンタブラチャーの高さが占める値は小さくなるとしている。実際の数値を見てみると、神殿建築に関しては全体として 3.5 ~ 4.5 の間に値が収まり、紀元前 300 年以前では値は 3.5 ~ 4.0 の間、それ以降は 4.0 ~ 4.5 の間に分布している傾向が見られ、値は徐々に大きくなっている。その他の建物では前 200 年以降より大きな値を示すものも見られた。

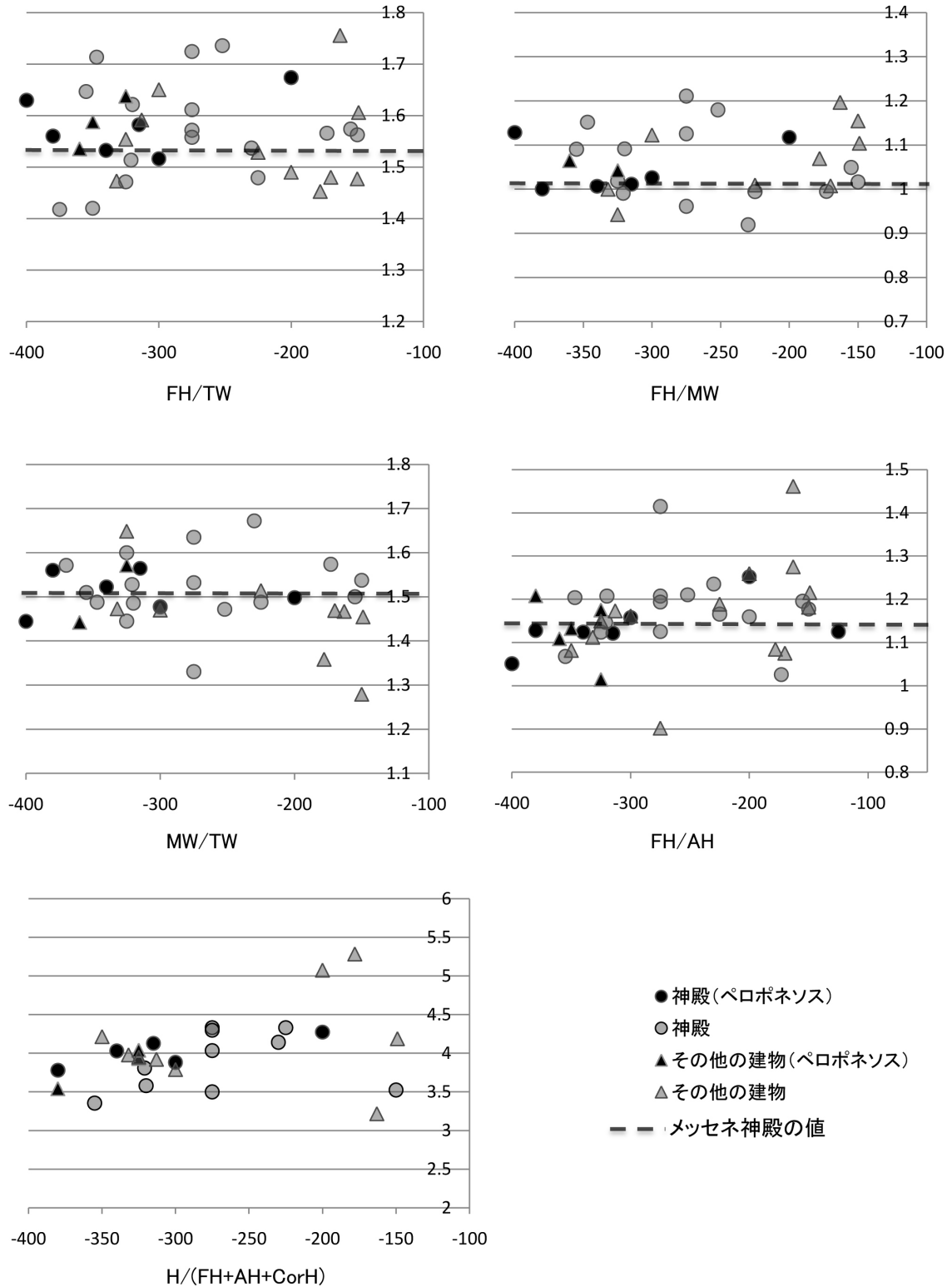


図 4-7 エンテラチャーのプロポーション分析表

f. エンタブラチャーのプロポーシヨンのまとめ

全体を通して、柱ほどの値の変化は見られなかった。縦に長いトリグリフはやや横方向に大きくなり、アーキトレヴに対してフリーズがやや大きくなる傾向が見られたが、全体的にその変化を読み取ることが難しかった。しかし、エンタブラチャーの高さと柱の高さの関係では神殿において値は3.5～4.5に収まり、その値は、年代が進むにつれ大きくなっていく傾向が見られ、オーダー全体の高さ関係としてははっきりとした傾向が見られることがわかった。メッセネ神殿の値に関しては全体的に紀元前300年以前のペロポネソス半島の神殿建築で見られる値と同様の値が見られる。しかし、全年を通して値の変化が分散しているため、プロポーシヨンからその建設年代を確定するには至らなかった。

3) メッセネ神殿の柱の高さの復元

ここまでのプロポーシヨンの分析からメッセネ神殿の柱の高さの復元を行う。各プロポーシヨンの値はメッセネ神殿の建設年代を裏付けるほどはっきりとした傾向が見られたわけではなかったが、メッセネ神殿の値はそのほとんどが紀元前300年を境にした値の平均的なものとしており、テメリス氏が考古学調査で判断した建設年代である4世紀の終わり頃、つまり紀元前300年頃と判断しても差し支えない数値を示しているといえる。そこで、傾向がしっかりと表れていた、柱の高さと下部直径の関係(H/D)と柱の高さとエンタブラチャーの関係(H/FH+AH+CorH)から柱の高さを決定する。メッセネ神殿の建設時期を紀元前300年頃とすると、柱の高さと下部直径の関係はおよそ5.5～6.5の間に分布している。また、エンタブラチャーとの関係はおよそ3.0～4.0の間に分布する。この値をもとに、現在残っている円柱ドラムの高さの平均値0.758 m(第2章円柱ドラム参照)と柱頭の高さ0.332 mの値を使って復元を行う。

円柱ドラムが5個積まれたとすると、柱の高さは $0.758 \times 5 + 0.322 = 4.122$ (m)となる。この値は下部直径(0.808 m)の5.10となり、低すぎる値を示すことがわかる。

次に円柱ドラムが6個積まれたとすると同様に計算して柱の高さは4.880 mとなる。この値は下部直径の6.04倍となり下部直径との関係では妥当な値を示す。また、エンタブラチャーの高さ(1.277 m)との関係では3.82の値を示し、この値も妥当なものとなることがわかった。

最後に円柱ドラムが7個積まれた場合を考えると、柱の高さは5.638 mとなり、下部直径との関係は6.98と大きな値をとり、エンタブラチャーとの関係では4.42の値をとる紀元前300年以前においてこのような値をとるものはなかったため当てはまらないといえる。結果として円柱ドラムは6個積まれたと考えることができ、柱の高さは4.880 mと復元することができた。

しかし、円柱ドラムの出土数は少なく、値も一定ではないため、その値には誤差は生じているものと考えられる。しかしながら、遺構現状からはこれ以上の値は望めず、この値を復元値とした。これで柱の復元が完了した。

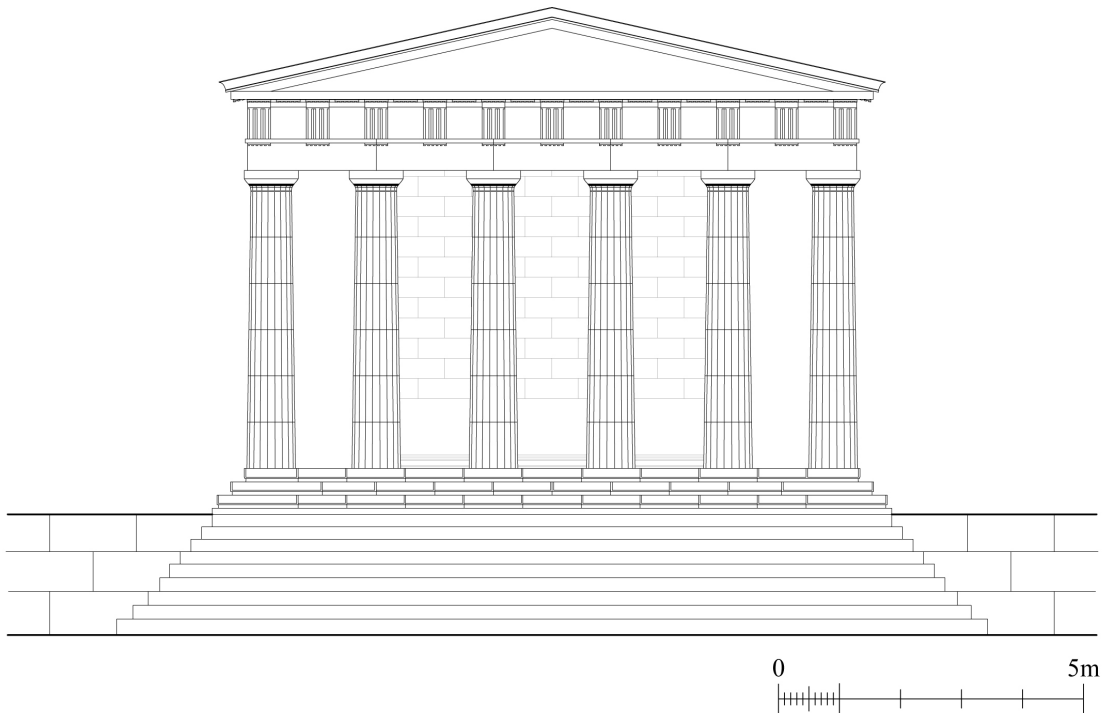


図4-8 メッセネ神殿西側復元立面図

3. モールディング

メッセネ神殿にはコーニスの下部とトイコベートの側面にモールディングが施されている。これらの装飾について述べる。

1) コーニスのモールディング

メッセネ神殿のコーニスの下部には、シーマレクタのモールディングが施されている。(図4-9f) ドリス式のコーニスの下部には本来はモールディングはつけられておらず、コーニスは直角に立ち上がっていた。(図4-9a) Coolton氏はドリス式で最初に使われた例はアテネのプロピライア(紀元前437～432)で、以降一般的に使用されるようになっていったと述べている。また、この時期のアテネにおけるドリス式とイオニア式の相互影響の兆候とみなせるかもしれないとも述べている。¹³⁾ メッセネ神殿で用いられているシーマレクタのモールディングは紀元前4世紀には既に一般的となったもので、デルフィのアテネ神殿をはじめ(図4-9e)、以降ほとんどのドリス式コーニスで見られる。¹⁴⁾

2) トイコベートのモールディング

メッセネ神殿のトイコベートの側面にはシーマレヴェルサのモールディングが施されている。このモールディングはコーニスにおけるモールディングよりも以前のアテネのヘファイスティオンで使われていた。¹⁵⁾ このモールディングもイオニア式の影響であると考えられているが、この装飾は一般的な物とはならなかった。¹⁶⁾

実際にトイコベートにモールディングが付けられたドリス式神殿は少数であったが、テゲア

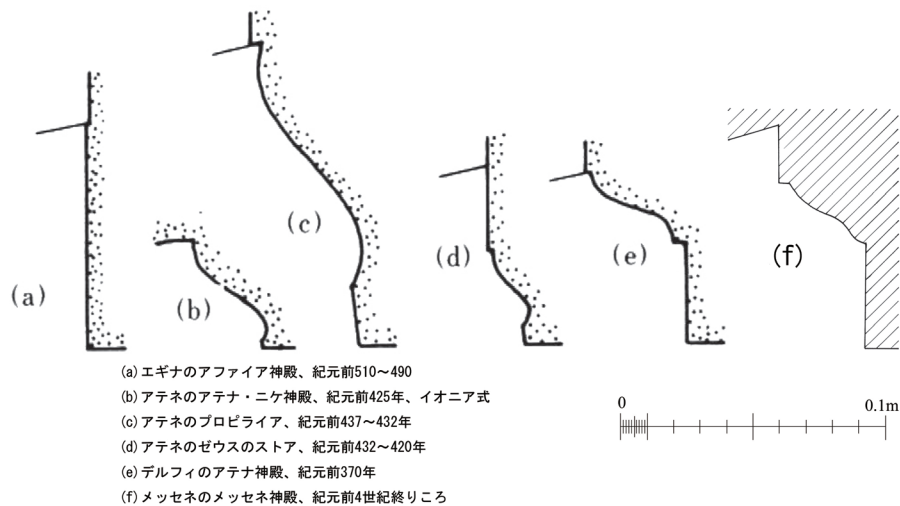


図 4-9 ドリス式コーニスの下部モールディング

のアテネ・アレア神殿¹⁷⁾や、同都市内のアスクレピオス神殿¹⁸⁾、デルフィのアポロ神殿¹⁹⁾などに見られた。(図 4-15 参照)

4. 西側階段

メッセネ神殿は西側に9段の階段を持っている。メッセネ神殿が立地するアゴラは南北で十数mの高低差があるため、これらの高低差を埋めるための役割は当然持っていたと思われるが、階段は明らかに神殿と関連づけて作られており、神殿の存在を強調している。(図 4-8 参照) ドリス式神殿において、神殿を高い石造りの土台(ポディウム)の上に設け、神殿を強調したり、前面に階段を設けるものは存在するが、それらは大規模な神殿に見られるものである。メッセネ神殿のように小規模な神殿においては見られないし、9段もの階段が3方向のアプローチで配置され、神殿の横幅をより広げるような形で強調しているものは非常に珍しい。イオニア式神殿ではしばしば、3段以上の階段から成る高い基壇の上に神殿を設け、モニュメンタルに見せることもあるため²⁰⁾、(図 4-10 参照)ヘレニズム期になり、イオニア式神殿に影響を受けたものとも考えられた。

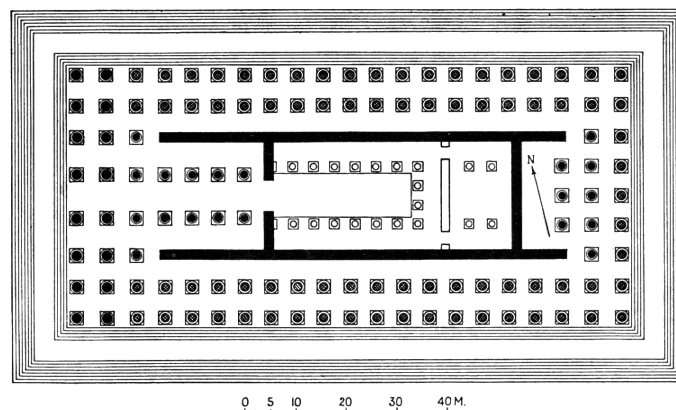


図 4-10 エフェソスのアルテミス神殿復元平面図(紀元前6世紀中期)

5. メッセネのアスクレピオス神殿との比較

最後に、同都市内に位置しているドリス式神殿、アスクレピオス神殿との比較を行う。アスクレピオス神殿は紀元前200年に建てられたメッセネ神殿と同じ周柱式のドリス式神殿である。

1) 規模、平面計画

どちらの神殿も柱数6x12の柱を持つ周柱式の神殿で、内陣にはプロナオス、ナオス、オピストドモスの3室を持っている。スタイロバートの長さによる規模ではアスクレピオスが343㎡、メッセネ神殿が218㎡であり、アスクレピオス神殿のほうが一回り大きい。内陣のアンタの位置は共に東西からは3番目の柱に、南北からは2番目の柱に対応しており、非常によく似た平面形式をしている。内陣の部屋の大きさの割合は、アスクレピオス神殿ではメッセネ神殿に比べてナオスの長さの割合が小さくなり、その分プロナオス、オピストドモスが長く作られている。また、アスクレピオス神殿ではプロナオスに扉を設置しない代わりにナオスの南壁面に扉を設けている。

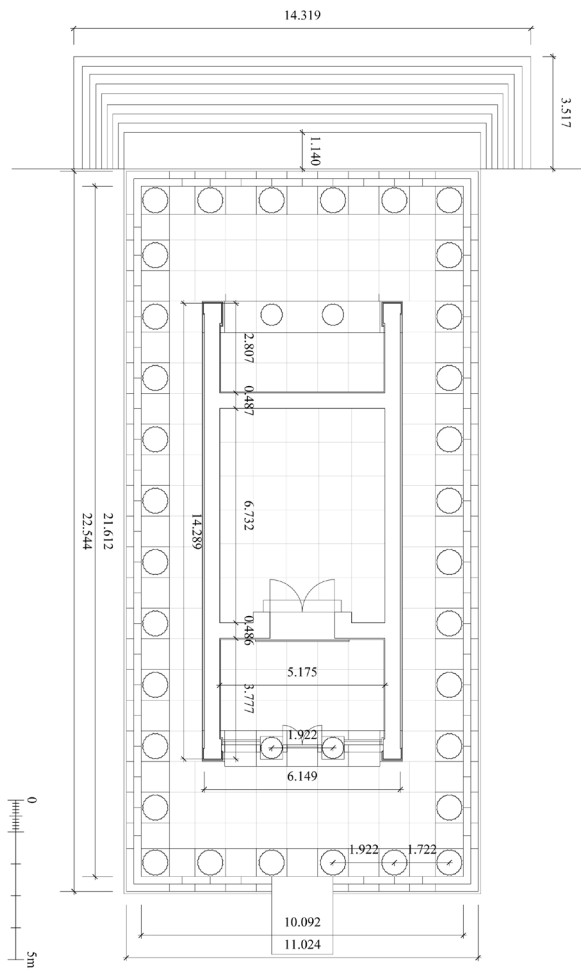


図4-11 メッセネ神殿復元平面図

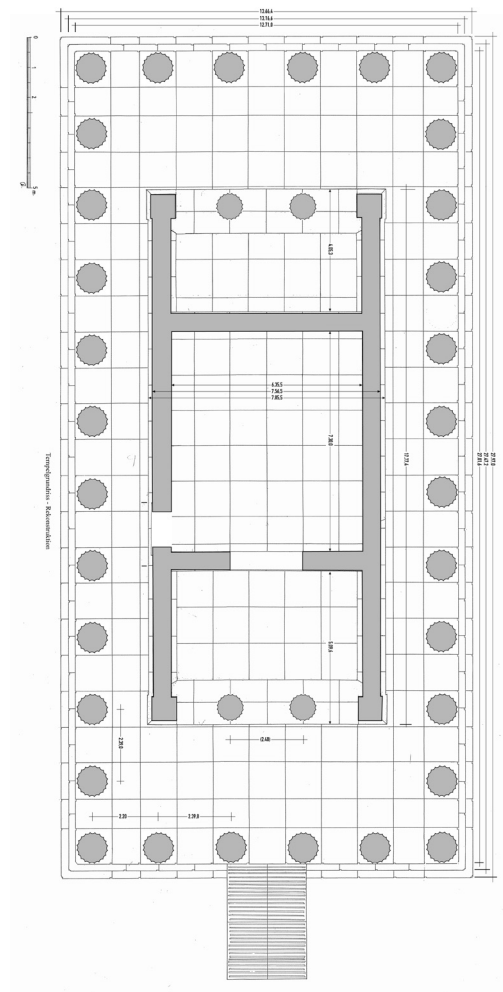


図4-12 アスクレピオス神殿（メッセネ）復元平面図

	柱数	基本柱間	全長	スタイロベート	面積(スタイロ)	内陣	ナオス
Asklepios	6x12	2.398-2.390	13.664x27.970	12.710x27.016	343	7.855x17.774	6.355x7.287
Messene	6x12	1.920	11.024x22.544	10.092x21.612	218	6.149x14.289	5.175x6.732

	H/D	d/D	H/CH
Asklepios	7.000	0.860	14.000
Messene	6.040	0.853	14.700

	FH/TW	FH/MW	MW/TW	FH/AH	H/(FH+AH+CorH)
Asklepios	1.674	1.117	1.498	1.252	4.274
Messene	1.538	1.021	1.507	1.148	3.821

図 4-13 プロポーション比較表

2) オーダーの比例関係

a. 柱のプロポーション

アスクレピオス神殿では柱頭が復元されていないため、比較できる数値は限られるが、柱の高さと下部直径との関係 (H/D) はメッセネ神殿が 6.04、アスクレピオス神殿が 7.0 ではっきりと年代の差が表れている。しかしながら柱のひずみ(d/D)の関係では、メッセネ神殿0.852、アスクレピオス神殿 0.860 でほぼ同じ値を示し、変化は見られなかった。

b. エンタブラチャーのプロポーション

アスクレピオス神殿の値がメッセネ神殿のメトープの正面長さとしトリグリフの正面長さの関係が同じ 1.50 の値を示しており、かつフリーズ高さに関する数値がすべて大きくなっていることから、アスクレピオス神殿はメッセネ神殿に比べて、フリーズを縦に伸ばしたような変化を遂げていたことがわかる。

3) 装飾

a. クレピス、スタイロベート、オルソスタットに見られる装飾

メッセネ神殿において見られた、クレピス及びスタイロベートの下部の 2 段の蹴上げ切り込みと正面の一方にのみにつけられる縦目地はアスクレピオス神殿においても見られた。また、オルソスタット部材において見られた、下部の深目地と一方の側面端部に見られる縦目地についてもアスクレピオス神殿で見ることができた。²¹⁾

b. トイコベートのモールディング

メッセネ神殿において、トイコベートの側面にモールディングが用いられていたことは前述のとおりである。ドリス式においてあまり普及しなかったといわれているこのモールディングであるが、アスクレピオス神殿ではより豪華で、イオニア式ベースに近い形状をもつモールディングが用いられていた。²²⁾



図 4-14 オルソスタットブロック（アスクレピオス）

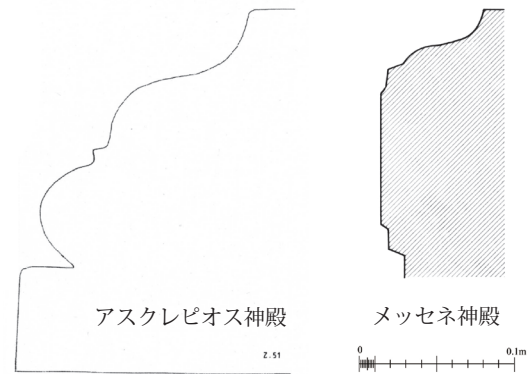


図 4-15 トイコベートにおけるモールディング

c. 内陣側面のトリグリフ

アスクレピオス神殿では内陣の側面にもトリグリフとメトープが設けられていた。このようなケースは非常に珍しい、しかし、メッセネ神殿においてもこのトリグリフが設置された可能性があることは第3章で述べたとおりである。（第3章図 3-34 参照）

4) 建築部材

a. 材質

建築部材に関する材質は、メッセネ神殿、アスクレピオス神殿共にほとんど同じで、クレピス、スタイロベート、トイコベート、オルソスタット、敷居、シーマ等は石灰岩によって作られていたが、円柱ドラムや柱頭、アーキトレヴ、フリーズ、コーニスはポロスで作られており、漆喰を塗ることで仕上げられていた。しかし、アスクレピオス神殿に関しては、内陣の柱頭とアーキトレヴに関しては石灰岩で作られていた。メッセネ神殿に関しては内陣の柱頭やアーキトレヴは見つかっていない。

b. 部材の形状と設置

部材の設置の仕方についてはメッセネ神殿とアスクレピオス神殿では違う点が見受けられる。例えば、トイコベートでは、メッセネ神殿では床材と同じレベルに配置されるのに対し（第3章図 3-28 参照）、アスクレピオス神殿では床材の上にトイコベートを配置する形となっている。どちらも内陣の高さはプテロンのレベルよりも高くなるように作っているが、設置の方法が違う。モールディングなどをつける場合にはアスクレピオスのような方法をとった方が設置しやすかったのかもしれない。

また、敷居に関して言えば、メッセネ神殿では複雑な形状の元に成り立っていた敷居部材や敷居と接するオルソスタット部材は（本書 p54-55, 66-67 参照）、アスクレピオス神殿では見られず、より簡潔に作られている印象を受け、技術の発達を感じさせる。

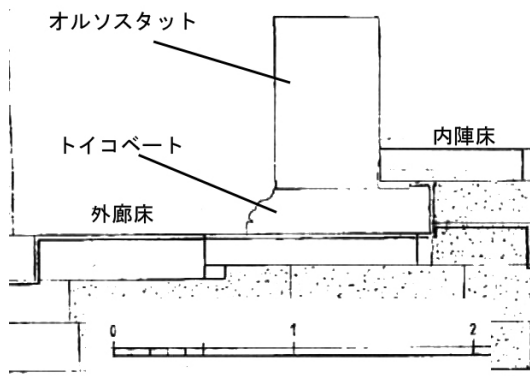


図4-16 トイコベート配置断面（アスクレピオス）

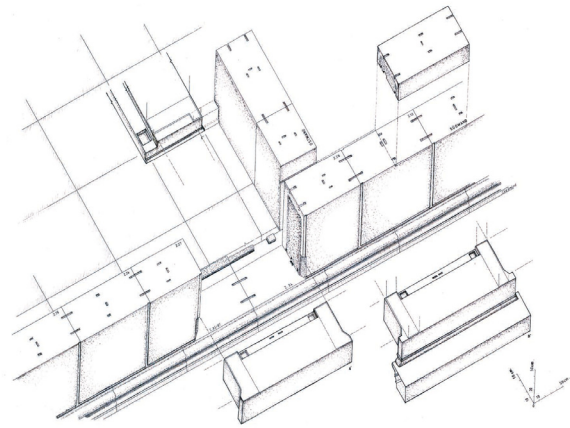


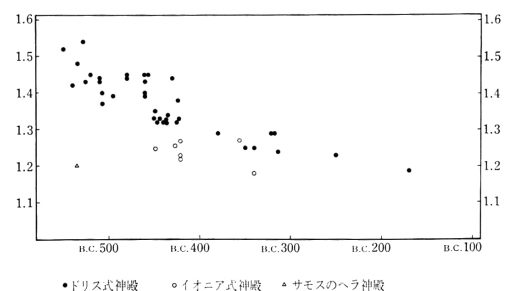
図4-17 ナオス南側敷居部材（アスクレピオス）

5) まとめ

ここまでのことから、アスクレピオス神殿とメッセネ神殿は平面計画や装飾など共通するものが多く、アスクレピオス神殿はメッセネ神殿を意識して建てられたと言える。しかしながら、時代の差ははっきりと表れており、アスクレピオスの柱のプロポーションは明らかにヘレニズム後期の値であったし、装飾などは、よりイオニア式の影響を受けていることが伺える。また、ひとつひとつの部材の形状は似ているが、例えばメッセネ神殿のナオス入口の敷居のように複雑な形状で他の部材と接合するのではなく、アスクレピオス神殿のナオス南側入口では敷居はシンプルな物に変化しており、接合部分の形状はより単純で機能的な部材の形状に変わったように感じられた。

(第4章註)

- 1) Themelis 2006, p43
- 2) Sioumpara 2006, Table 23-25
- 3) 前掲註1)の資料を参照し、可能な限りで寸法を収集し、加筆できる部分に関しては寸法を加筆、修正した。参考文献が手に入らず、寸法値を直接確認できなかった数例に関しては、E. P. Sioumpara氏の寸法値をそのまま引用している。寸法値に関しては、基本的に記述や図面にて値が述べられている寸法値に関して採取したが、柱頭のプロフィールなど、細かな部分に関して、正確なスケールバーと図面があるにもかかわらず、寸法値が記入されていない場合は、スケールバーより、寸法を採取した。また、周柱式以外の神殿、及び、その他の建物に関しては、詳細な寸法値が得られる物のみを挙げた。それぞれの参考文献に関してはPLATE 120, 121に示した。
- 4) Dinsmoor 1975, p 217
- 5) 堀内 1979, p 123-124
- 6) Dinsmoor 1975, p 217
- 7) 森田 1974, p 96-100
- 8) 西洋建築史図集, 11-4 オーダー
- 9) 今回の分析においてはエキヌスの高さのなかにアニュレットの高さを含む形で行った。
- 10) 前掲註8)と同じ
- 11) 今回のサンプル資料ではシーマの部材までが残っているものはほとんどなかった。そこで今回の分析ではシーマを除くコーニスまでの部材をエンタブラチャーとして分析を行った。
- 12) 堀内 1979, pp 130-131、実際には堀内氏はオーダーの高さに対する柱の高さの関係について述べている。つまり、 $(H+FH+AH+CorH) / H$ である。今回の分析では、わかりやすく表現するため、柱の高さがエンタブラチャーの高さの何倍になっているかという数値によって分析を行った。彼は6世紀には1.5(今回の分析値に変換すると2.0)を上回る物がみられ、前6世紀末期から前5世紀前半では1.4(変換値は2.5)というように値は小さくなり、4世紀中ごろを過ぎたころになると、値は1.25(変換値は4.0)になると述べている。詳しくは下図参照(堀内 1979, P130, 図5-1-20)。今回の分析ではサンプル数を増やし検討した結果おおよそであるが同様の結果が得られた。
- 13) Coulton 1977, pp. 99-101.
- 14) 実際に今回プロポーションのサンプルとして集めた資料においてはほとんどの神殿にこのモールディングは使われていた。
- 15) Dinsmoor 1941, pp. 40-41
- 16) 前掲註13)と同じ
- 17) Norman 1984, pp. 172-173
- 18) Sioumpara 2006, Tafle 84
- 19) Ginouves 1992, Pl. 14-5
- 20) エフェソスのアルテミス神殿、サルディスのアルテミス神殿、ディディマのアポロ神殿、トロアードのアポロ神殿、マグネシアのアルテミス神殿などにおいて使われている。Dinsmoor 1975, figs. 81, 82, 83, 98, 99 参照



オーダー対柱高比の時代的推移

21) Sioumpara 2006, Tafel 46-49, 109-127

22) Sioumpara 2006, Tafel 84-108

(図版出典)

- 図 4-1 : ドリス式神殿分布図 (紀元前 4 世紀～紀元前 1 世紀)、筆者作成
- 図 4-2 : 周柱式神殿規模比較表 (紀元前 4 世紀～紀元前 1 世紀)、筆者作成
- 図 4-3 : 柱のプロポーション使用寸法図、筆者作成
- 図 4-4 : 柱のプロポーション分析表 1、筆者作成
- 図 4-5 : 柱のプロポーション分析表 2、筆者作成
- 図 4-6 : エンタブラチャーのプロポーション参照寸法図、筆者作成
- 図 4-7 : エンタブラチャーのプロポーション分析表、筆者作成
- 図 4-8 : メッセネ神殿西側復元立面図、筆者作成
- 図 4-9 : ドリス式コーニスの下部モールディング、Coulton 1977, p99, fig39 を筆者が加工
- 図 4-10 : エフェソスのアルテミス神殿復元平面図、Dinsmoor1975, p226 fig 81
- 図 4-11 : メッセネ神殿復元平面図、筆者作成
- 図 4-12 : アスクレピオス神殿 (メッセネ) 復元平面図、Sioumpara 2006, Tafel17
- 図 4-13 : プロポーション比較表、筆者作成
- 図 4-14 : オルソスタットブロック (アスクレピオス)、筆者撮影
- 図 4-15 : トイコバートにおけるモールディング、Sioumpara 2006, Tafel84 を元に筆者作成
- 図 4-16 : トイコバート配置断面 (アスクレピオス)、Sioumpara 2006, Tafel 32
- 図 4-17 : ナオス南側敷居部材 (アスクレピオス)、Sioumpara 2006, Tafel 22 を元に筆者作成

第5章 結論

1. 本研究の総括

メッセネ神殿は2003年に発掘された新しい遺構であったため、これまで十分な報告がなされていなかった。したがって、熊本大学ギリシア古代建築調査団（団長 伊藤重剛）が2005～2007年に行った神殿の実測調査は、詳細な資料を得るための唯一の方法であるだけでなく、ヘレニズム期になり、その建設数を大幅に減らしたドリス式神殿の変遷を知る上でも貴重な資料提供となるものである。

本研究によって明らかとなったメッセネ神殿の特徴は以下の項目に統括される。

1) 神殿の規模と周辺計画

メッセネ神殿は正面6本、側面12本の柱を持つ周柱式のドリス式神殿であり、神殿のクレピス下段での寸法は11.024 × 22.544 m、スタイロバートでの寸法は10.093 × 21.625 mであった。その規模は岩盤の掘り込みや、石碑台座の位置から妥当な寸法といえる。この規模は、周柱式の神殿としてはかなり小規模なものであった。

現在残る基礎に関しては、東側のポロス材は、東側プテロンの床を支える基礎部材であり、西側に残る基礎部材は西側スタイロバートの基礎部材であることが判明した。また、北側と西側の荒石の基礎は、神殿の周囲のいわば犬走りに相当する部分の基礎であると考えられた。

神殿西側には北、西、南の3方向に開けた9段の階段を持っていたことがわかった。ドリス式神殿においてこのような階段が設けられることは非常に珍しい。メッセネのアゴラ全体では南北の高低差は十数mに及び、またメッセネ神殿の付近では東西の高低差もあることから、基本的にはその高低差を埋めるための役割が大きかったと考えられる。しかしながら、階段は明らかに神殿に関連付けて設置されており、神殿の存在を強調している。イオニア式神殿では、3段以上の階段から成る高い基壇の上に神殿を設け、モニュメンタルに見せることもあるため、こうしたイオニア式神殿に影響を受けたものとも考えられる。こうした計画や都市の中心であるアゴラのほぼ中心に建てられていることから、メッセネ市民にとって特別な神殿であったことは間違いない。

2) 神殿内陣部

メッセネ神殿の内陣はプロナオス、ナオス、オピストドモスの3室をもつ平面をしていた。内陣の外法幅は6.149m、奥行きは14.289mであり、各部屋の幅は5.175mであった。各部屋の奥行きはそれぞれ内法で3.777m、6.732m、2.807mであり、プロナオスがオピストドモスよりもやや長くなっている。また、プロナオス、ナオスの入口には扉が設けられており、複雑な形状の敷居の部材によって構成されていた。扉の開口幅はプロナオスで約1.1 m、ナオスで約2.03 mであった。床の高さは、プテロンの床材の高さを0とすると、プロナオスの敷居部分が+0.231 m高くなっており、プロナオスの内部はプテロンと同じ床となっている。

さらにナオス入り口の敷居は、プテロンの床に比べて、+ 0.400 m高くなっており、ナオスの床は+ 0.231 m高くなっていた。オピストモスの床はプテロンと同じ高さだった。

内陣に使われていた部材の配置を復元することができた。オルソスタット部材は、対応するトイコベート部材の約2倍の長さになっており、ダボ穴の無いトイコベート部材を中心にして配置され、その両側のダボ穴のあるトイコベート部材に、端部をダボ穴で固定されて配置される。内陣に使用されたトイコベート部材は全体で37個、オルソスタット部材は21個だと考えられ、トイコベート部材は28個、オルソスタット部材は9個が現存していた。また、トイコベート部材は、東西のアンタからナオスに向かって設置されていき、最終的にナオス側面壁部分で部材を落とし込む形で設置されたことがわかった。これはおそらく、落とし込み部材によって最終的な誤差を修正するためだと考えられる。対して、オルソスタットはおおよそ南西から配置され、東側に向かって配置されていき、落とし込み部材は使われなかった。これはオルソスタット部材が大きく、重量もかなりのものであるため、落とし込むことは非効率的だったのではないかと考えられる。その証拠に、オルソスタットの上部に配置される、壁ブロック部材はトイコベート部材と同様に東西のアンタから設置されていき、どこかで落とし込まれるようになっていた。

内陣の南北の壁心はおおよそではあるがそれぞれ南北隅から2番目の柱の中心軸に対応していることがわかった。また、アンタのトイコベートの先端は隅から4番目のスタイロベート部材の端部に対応し、内陣側面壁のトイコベートの長さはおよそスタイロベート部材15枚分となることが推測できた。アンタのオルソスタットの先端は隅から3本目の柱の面に対応している。さらに、プロナオスの仕切り壁、オピストモス仕切り壁の外側面はそれぞれスタイロベート部材の端部に対応しており、内陣部は外周部と密接な関係の下に設計されていることが改めて判明した。

3) オーダーのプロポーション

4世紀以降のドリス式柱をもつ建築のデータを集めプロポーションの変化を読み取ろうとしたが、前300年以前の物は比較的值が安定するものの、以降は値が分散するという傾向が強く、はっきりとした変化を読み取ることが難しかった。しかしながら、柱の高さと下部直径の関係、エンタブラチャーの高さと柱の高さの関係でははっきりとした傾向がみられた。メッセネ神殿の建設年代がテメリス氏が言うように前4世紀の終わりころ、つまり前300年ころとすると、出土部材と比例関係を用いることで高さを決定することができ、柱の高さは4.880 mで柱の下部直径の6.02倍の値をとることがわかった。また、メッセネ神殿のオーダーの比例関係は各数値ともおおよそ平均値を通るものだったが、4世紀終わりの神殿としてはやや柱頭のくびれが大きく、柱のくびれは小さい傾向が見てとれた。

4) 同都市内のアスクレピオス神殿との比較

アスクレピオス神殿はメッセネ神殿よりも約100年後に建てられた神殿であるが、平面形状、各部材の装飾など、メッセネ神殿と類似する事柄が多く、明らかに意識して作られている

ことがわかる。また、メッセネ神殿に見られたトイコベートのモールディングはアスクレピオス神殿にも受け継がれており、より豪華なものとなっていた。オーダーのプロポーションは高さに関する数値がメッセネ神殿よりも大きくなっており、メッセネ神殿に比べて縦に長くなる変化を遂げていた。また、部材の形状からは、メッセネ神殿に見られた複雑な部材はなく、シンプルでかつ機能的な形に向上している。

2. 今後の研究課題と展望

本研究では、出土部材を使って、神殿の復元を行い、神殿のおおよその形状を復元することができた。しかし、この神殿に関する歴史的背景に関しては、いまだ謎である部分が多い。今後は考古遺物を絡めての研究も必要である。また、アゴラの発掘は現在も続いており、いまだそのほとんどが未発掘であるため、今回の研究では周辺建築との関係性などを読み取るにはいたらなかった。四方をストアに囲まれ、しかも地形にはかなりの高低差が見られる、そのような場所がどのように計画され、この神殿がどのように関係付けられたのか、それを知ることはメッセネ神殿の歴史的 position のみならず、ヘレニズムの都市を知る上でも重要な課題となるだろう。